

一八世紀の「ドイツ民族」?

— 事典・辞典類の記述を素材として —

山 田 欣 吾

—

「三世紀もドイツという獅子 (der teutsche Löwe) は眠っていた。……それはもはや、民族なるもの (ein Volk) が何をなしうるかを忘れていた。……「だがいまや」それは目を覚まし、枷をうち砕くだろう、そして、それは、自らを術策と悪業の畏につないできた者たちの無価値と無惨とを怖しくも見事にあばくだろう。しかし、ドイツ民族よ、神は汝に愛と信頼を与えるだろう、そして、汝は自らが何者であり何者たるべきかを知るだろう。……いざ、ドイツの男よ! いざ、自

由と誠実をもって隷属と偽りに抗して立ち上ろう!……然して、かかるフランス人を恐れることがあろうか。……まことに、フランス人のもとには薄き明りしかないのに対し、汝は燃えさかる炎を持つ。かれらのもとには巧みさしかないのに、汝は力を持つ。かれらには欺瞞しかないのに、汝には誠実がある。……汝は、風が羽毛を吹き飛ばすように、かれらを吹き飛ばすだろう⁽¹⁾」。

E・M・アールントが、非常に広く読まれた『ドイツ兵士のための教理問答』(一八一三年)のなかで兵士人民にむかって右のように書いたのは、J・G・フィヒテが、ベルリン大学の講堂から「ドイツ民族にむか

(2) 自ら尊敵の自覚を呼びかけてから五年後のことであった。そして、まさにその年、プロイセンを中心とする連合軍は、ライプツィヒ近くでナポレオンの軍隊を決定的に破り、「解放戦争」を輝かしい勝利のうちに終らせたのであり、同時代人はこの戦いに史上初めて「民族の戦い」(Völkerschlacht)という呼称を与えたのであった。一九世紀初めのこの時期は、「ドイツ民族 (Deutsches Volk)」が知的エリート⁽³⁾の觀念においてのみならず、Volkなる語のもう一つの意味である「人民」のレヴェルにおいても意識化され始める画期であったとみることができる。

さて、一九世紀初め以来、ドイツの民族意識が急速に「深化・強化」されたという評価については、大方の異論はないと思われるが、筆者がいま述べたように、その時期をまさに民族意識の形成され始める画期だと見たいとなると、事は厄介になるはずである。言うまでもなく、こうした言説が成り立つためには、それ以前における民族意識の未形成という認識が何らかの形で示されていないなければならないからである。この点で、

最近のB・シェーネマンの丹念な概念史の追跡はそれを裏付ける上での有力な素材を提供しており、また、わが国の佐々木博光氏の研究もその方向を示唆する画期的見通しを打ち出しているのであるが、ここでは、小論の枠を考慮して、問題を多面的に検討することは断念し、たった一つ、一八世紀から一九世紀の諸々の事・辞典において「ドイツ民族」およびそれに関連する諸概念がどう記述され、どう扱われているかを瞥見することに絞って若干の根拠所見を提供してみたい。

二

まず、一八世紀ドイツで作られた最初で最大の百科事典、J・H・ツェドラーの『世界學術・芸術大百科事典』(六八巻、一七三二―五四年)から始めよう。この百科事典には、目指す「ドイツ民族 (Deutsches Volk)」という見出し語は見当らない。Deutsche Völker (ドイツ諸民族) という不思議な項目が目に入るが、そこには「Teutscheを見よ」という参照指示しか書かれていない。そこで、われわれもそれに導かれて Teut-

sche (ドイツ人) という語に向うことになるのだが、その前に、この事典が Volk, Nation といった基礎概念をどう扱っているかに目を配っておくのも無駄ではない。

„Volk“ という語は第五〇卷 (一七四六年) の三六二—三七五欄にわたってかなり詳しく記述されている。それがラテン語の *Populus* にあたることの指摘に続いて、まず、概念の一般的内容をつぎのように説明する。すなわち、キケロ、アウグスティヌスはそれを、「多くの、ないし一団の人々のことで、しかもすべての人が互いに一つの法によって利益を享受するか、または共通の善のために結集し、一種の社会を設立したものの」としているが、「そもそも Volk とは、多くの人の集まりを言う」のであって、それは何となく出来上ることもあるし、福祉を促すために意図して結合することもあるし、上から集められること (例えば領邦君主の兵士) もある、と。Volk 概念は基本的に、ほとんど「人の集団」というほどの意味におさえられているわけである。ここから話は一気に、そうした人の集

団がそもそもこの世に現れた最古の姿いかんというこ
とに向い、人の起源についての異教的神話を退けると
ともに、創世記などの素材に基づきつつ、ノアの三子
から世界の諸民族 (*Völker*) が出現する過程が延々書
きつらねられる。さらに、探検家、航海者のしばしば
信用ならぬ報告などと批判的に対決しながら、世界に
は神を知らぬ諸民族、さまざまな宗教を信ずる人々が
いること、さまざまな習俗 (*Sitten*) があることが述
べられる。しかし、人々の習俗を不変のものとする考
えは「迷信だ」として退けられ、その変化にこそ歴史
の秘密を見るべきことが主張される。だから、為政者
はよき習俗を作り上げるために心を砕かなければなら
ず、他の諸民族との交流はそのため大いに役立つの
だ、として、ザクセン人 (!) がポーランド人、ロシ
ア人、オーストリア人 (!) との交流から得た善き事
などが強調される。そして、最後に、諸民族の違った
習俗を生み出す要因として、一般的に、気候風土、飲
食物、血 (*Geburt und Gebüte*)、教育および交流がそ
れぞれ指摘されて Volk という語の説明が締めくく

られる。

フォルクは、ここではせいぜい習俗を異にする人間の集団として「民族誌」的次元でとらえられるのみで、言語・文化の共通性が特に指摘されることもなく、ラテン語のポプルスを含む政治的色彩も意識されることはない。そうしたフォルクの一つとして「ドイツ人」も数回言及されているが、それは、一つには、個々の習俗の違いという話題について「ドイツ人」をフランス人、イタリア人、オランダ人などと同レヴェルで対比する場合と、また、もう一つには、タキトウス時代のゲルマン諸民族が一括して(しかも必ず)「ドイツ人」と呼ばれる場合に用いられるだけである。また、ここで同時代のヨーロッパが問題になるとき、ロシア人、ドイツ人、フランス人、イタリア人などのみがVolkではなく、ザクセン人、メックレンブルク人、シュヴァーベン人、オーストリア人、マイセン人、ブラウンシュヴァイク人などもVolkとしてとらえられ、論じられていることも、この概念内容を押さえる上で見逃すことの出来ないところである。

Nationという概念(第二三巻、一七四〇年)の説明ははるかに簡潔である。Nationとは「本来の第一の意味からすると、同一の慣習、習俗、法律をもつたまった数の市民をいう」。したがって、地球上の大小の居住地域が、即 Nationenの単位をなすのではなく、「この違いは専ら生活様式と慣習の差に基づくものであるから、しばしば小さな地方の中にもNationを異にする人々が住んでいることがある」。例えば、四方をドイツ人(Deutsche Nation)に囲まれて狭い地帯に住むヴェント人を想え。「Nationという語は、ある地域に居住するところの、本来はVolk(Populus)と呼ばれるべき諸ナチオン総体に対置されるものだ」といわなければならぬ。しかし、「Nationという語は、ある一定のまとまった地域に居住する「そうした」Volkについても用いられるという慣用が早くから始まった」。だがそれでも、フランスの地でドイツ人の両親から生まれた子供はやはりDeutsche Nationに属すると見なければならぬ、というのである。つまり、ここでのNationは、ラテン語(natio)の語義に

より忠実に、また、出自や習俗を共通にする人間集団として理解されている。そして、一九世紀以降この言葉の中心語義をなす政治的意味をそこに嗅ぎ出すことは全くできないのである。

さて、「Teutsche」という大項目(第四二巻、一七七四年、一六八〇—一七三一欄)に向かおう。執筆者はまず、この語を、ラテン語の *Alemanni*, *Teutones* にあたり、「その古さと特別の勇敢さをもって名のある大民族 (*Grosses Volk*) のことであって、その中に多くの他の民族を含む」と規定したのち、「Teutsche」の起源、名称、「各種のドイツ人」、政体、法・刑罰制度、軍制、家生活、気質、結婚、埋葬、宗教といった順番で非常に手広く記述を行う。しかし、極めて特徴的なことに、その内容は事実上、一貫してゲルマンの古事に終始しており、われわれの期待する同時代の「ドイツ民族」などには全く触れることすらない。

すぐ後で述べるように、この項目の筆者にとっては、古代の著作者がゲルマン諸族に数えたものがことごとく「Teutsche」なのであるが、その起源と名前の由来を

巡ってこの筆者が次々に並べたて検討する諸説は、ルネサンス期に古代作者のテキストが発見されて以来提起されて来たその解釈の総まくりであり、ここでそれに立ち入る意味はない。むしろ興味深いのは「ドイツ人」なる語のもとで何が考えられているかということの方である。それは大きく五つの主要グループに分けられ、さらにそれぞれのグループのもとに多くの民族 (*Völker*) の名前が列挙される。五つの大グループとは、*Wandalen*, *Ingävones*, *Istaevones*, *Hermiones*, *Bastarnä* であり、第一のものを除いて、他の名前はいずれも一応タキトゥスに由来する。

① *Wandalen* は、おそらく後代の構成になる分類であって、ゴート族、ランゴバルド族、ブルグンド族、ヴァンダル族、それにアングルン族など「古き父祖の地を去ってフランス、スペイン、シチリア、アフリカなどに移り住み、そこでうまく居を立て得なかったもの」たちのことである。② *Ingävones* は北方系の諸族で、ザクセン族、キンベルン族、スヴェオーネン(スウェーデン)族、シトーンネス(ノルウェー)族などを

含む。③ タキトウスが「その他の諸族」と呼んだ *Isaevones* に属するものとしては、フリーゼン族、ブルクテリー族、カマーヴィー族など一五民族が挙げられてい、同じく、④ タキトウスにより、「中間に住むもの」とされている *Heminnones* のグループには、ヘルムンドウール(シュヴァーベン)族、カッティ(ヘッセン)族、ケルスキー族など一四民族が数えられる。そして、⑤ 最後の *Bastarna* は、「一番東方に居住した諸族であって、タキトウスがそれを「ゲルマーニア族に数えるべきかどうか迷った」(『ゲルマーニア』第(四六章) 民族である。また、五つの主要民族集団のほか、「ラインの向こう、旧ガリアの地には、次のようなドイツ諸民族 (*teutsche Völker*) が住んだ」として、トリボキ族、ネメテース族など一四民族の名が挙げられている。

以上が全部「ドイツ人」であって、こうした「ドイツ人」はすべて大小の移動を行ったから、その地理的報道を誤らないためには、古代、中世、近世の歴史を十分注目すべきことが一般的に要請されるが、その過

程そのものについての言及は全くなされていない。したがって、項目の筆者にとつては、かれの同時代においても、大きな民族としての「ドイツ人」を云々することができると考えていることは確実であるが、その姿を積極的な形で知ることには残念ながらできない。ただ、太古の「ドイツ人」との関連で言えば、かつては遙かに広く分布していた「ドイツ人」のうち、長い歴史過程を通じてずっと「ドイツ人」に止まった者が今の「ドイツ人」なのだ、というイメージがこの筆者には抱かれていたと見ることは出来るだろう。⁽⁸⁾

ツェドラーの『百科事典』から同時代のドイツについて情報を得ようとする際に見逃せないのは *Teutschland* という項目(第四三巻、一七四五年、二七三—二九五欄)である。「ヨーロッパの一大国 (*Land*)、温帯に位置する、境界、内部区分、政体その他の特色については、絶えず往時、近時に目を向けなければならぬ」として、ドイツの境界、ドイツの内部区分、統治諸形態、国の性状、ドイツの(国)力、宗教という順でその概観がなされる。「ドイツ」という言葉のも

とで、およそ同時代の「Teutsches Reich」が枠組みを提
供していることは言うまでもないが、その国制に関す
る形式的解説はともかく、国力、民生などの記述にな
ると、諸国の実態を「帝国」レヴェルに集計して扱う
ことができていないために、ほとんど見るべき情報は
得られない。

ところで、この項目の記述において、およそ「民族」
なるものに視線が向いていないことは著しい特徴であ
る。「ドイツの内部分」の歴史を一瞥する時には、カ
ール大帝の国（これも勿論ドイツである）をはじめ
折々の国の外枠が前提され、その中のいわば行政区分
（例えば一〇帝国クライス）が問題になるだけで、住民
の民族的構成などに言及及ぶことはない。⁽⁹⁾「国の性状」
という部分では、地勢のほか当然「今日の住民」が
扱われるが、ここでは例の粘液質、多血質といった気
質類型論を土台にして、ドイツ人は自由を愛し、勇敢
で、学問に優れている等のことが述べられているだけ
で、しかも、そうしたドイツ人の「個性」ないし「特
徴」を指摘することと並んで、ドイツ人は好んで外国

の風を真似する傾向があること、とくに近年フランス
の風俗が広く取り入れられていることがおおらかに付
言される。項目の筆者がこの傾向に苦々しい思いを抱
いているようなニュアンスは認められない。

三

ツェドラーと並んで、一八世紀に作り始められた著
名な『百科事典』にJ・G・クリューニッツのそれが
ある。⁽¹⁰⁾しかし、『経営・技術百科事典』(Öconomisch-
technologische Encyclopaedie)と銘打ったこの『百科
事典』は、一七七三年に第一巻が出て以来、最後の第
二四二巻が一八五八年に送り出されるまでに一世紀近
くもかかっており、したがって、個々の記事の検討は
どうしてもその巻の刊行年代と睨み合わせて行う必要
がある。

ツェドラーの場合と同様に、まず、「ドイツ民族」を
この事典(第九巻、一七七六年、一六七頁)に尋ねる
と、目指す場所には該当語がないばかりか、近くにあ
るはずのDeutsche, Deutschlandなど関連語も見いだ

すことが出来ない (Teutsche についても同様)。Deutsch-Gold, Deutsch-Schwarz, Deutsches Dach などと並んで、ただ Deutsche Schule という見出語のもとで、外国人がドイツの画家全体をこう言い習わしているという短い説明がなされているだけである。なぜこうなのか、を筆者はいま十分に説明することは出来ないが、おそらく一九世紀に進んでからの時代情勢の中であったら、百科事典の編者が「ドイツ」、「ドイツ人」といった項目を拾うに値しないと考えることはまづなかったのではないかと思われる。

それはともかく、つぎに問題となるのは Nation 概念である。この巻(第一〇一卷、一八〇六年、三九三—四一五頁)は一九世紀へ越えてからの刊行であるにもかかわらず、大革命がフランスにおいてこの概念に深く刻み込んだ政治的意味は、直接的には、ここでの説明自体にほとんど影響を与えていない。この概念は相変わらず前政治的にとらえられており、その扱いは先に見たツェドラーの場合と基本的に同じであって、それは、一八世紀後半のドイツにおけるこの概念の標

準的理解を示していると考えてよい。そして、筆者のこの判断は、実は、一つの文献学的確認にも支えられているのであるが、その点は後回しにして、まずは、クリューニッツにおける Nation の語義説明を聞けばこうである。

「ラテン語の *Natio* に由来する。共通の起源をもち、共通の言語を話すところの、あるラント土着の住民である、そして、やや狭い意味では際立った思考・行動様式ないし *Nationalgeist* (民族精神) によって他の諸民族 (*Völkerschaften*) から区別されるものをいう、さらに、それは単一の国家をなすことも、多くの国家に分かれることもある。ドイツ、フランス、スペイン、イタリア、ロシア Nation。こうした Nation の個々の部分、すなわち、ある方言を話す地方住民が時に *Nationen* と呼ばれるが、その用法は構成員が *Nationen* に分かれていた昔の大学においても用いられた。この語がラテン語から借用される以前は、*Nation* のかわりに *Volk* を用いたが、昔の

Nationenについてはなおそれが使われている。

しかし、この語の多義性のゆえに大体においてそれ [Volk] をこの意味で用いることは放棄され、Nation に ついて Volkerschaft なる語を導入する試みがなされてすでに大方の賛同を得ている。

この語義説明は、後述するアーデルンクのドイツ語辞典の Nation の項目 (一七七七年) を一何ら断りなしに一文字どおり引き写し、それに短い、しかしかなり大事な追加をしただけのものである。書き加えられたのは、「やや狭い意味では際立った思考・行動様式ないし民族精神によって他の諸民族から区別されるものをいう」という右の引用の傍線部分である。おそらく、この書き加え部分に、大革命以来の激動がドイツの思想状況に及ぼした影響を見て取ることは正当だと思われるが、それでもなお、ナチオンが前政治的概念にとどまっている点については変りない。ナチオンは決して政治形象ではなく、しかも必ずしもエスニックに規定されているともいえない多様な言語、文化集団としてとらえられているわけである。そして、一応こ

のように語義を押さえたうえで、項目の筆者は自前の記述に移り、およそ人類がナチオンに分かれるというのはなぜなのか、いかなるものがナチオンの規定要因なのかをいわずに哲学的に思索し、さらに、National-Character を生み出すのに気候、風土、統治形態、宗教、教育の及ぼす影響をやはり思弁的に検討して、そして、それぞれにそれなりに重要な役割を認めつつ長い説明を終る。

ところで、Nation と並んでもう一つの基本概念 Volk については、クリューニッツの『百科事典』第二七巻にかなり大きい項目がある。⁽¹¹⁾しかし、この巻が刊行されたのは一八五五年であって、これをツェドラーなど一八世紀のそれと一緒に扱うことはできない。

概念の記述内容からしても、それはむしろ、一九世紀第二四半期以降のブロックハウスやエルシュ・グルーバー⁽¹²⁾と合わせて別に分析しなければならぬものである。そこで、ここでは、『百科事典』の検討はひとまず打ち切り、一八世紀から一九世紀初頭の重要なドイツ語辞典の中に問題の諸概念をたずねる作業をしてみよ

う。右で実例を見たように、言語辞典の『百科事典』に対する影響は否定できないばかりか、時代がその言葉に込める意味内容は、言葉の最も敏感な観察者、採取者によってそうした辞典の中に掬い取られているはずだと想定されるからである。

四

J・Ch・アーデルンクの『高地ドイツ語辞典』全四巻は、一七七四年から一七八六年に初版が、そして、一七九三年から一八〇一年に「大きく全面的に改定された」第二版が出た一八世紀を代表するドイツ語の大辞典である。¹⁴⁾ その第二版が近年復刻されて利用できるようになった。しかし、今のところ、初版を見る機会に恵まれていないので、重大な二〇年をはさんだ第二版の記述との違いいかんという興味深い関心を満たすことまではできていない。

まず、Deutsch, Deutsche, Deutschlandといった語は相互に組み合わされて、それ以上説明の不要な概念として扱われている。例えば Deutsch は「ドイツ人に

固有の」Deutsch は「ドイツに生まれついた者」、Deutschland は「ドイツ人のラント」という具合である。「ドイツ」は既にこの上なく自明な概念になっている。しかし、「ドイツ人」が「ドイツ民族」として改めて対称化されることはなく、「ドイツ」に住む「非ドイツ民族」は果して「ドイツ人」か、というパウルス・キルヒエの国民議会(一八四八―九年)を沸かせた大問題¹⁵⁾などは、毛筋ほども意識に上ることがない。Deutsch の項には注が二つ付いていて、一つは、それ自体かなり注目に値する語源の考証、もう一つは、語の綴りに関するDかTかという議論であるが、それを特にここで扱う必要はない。

ところで、アーデルンクの Nation¹⁶⁾ が政治以前的に規定されていたことは、すでに上でクリューニッツによる孫引きを検討した際に考察したが、Volk 概念(第四巻、一八〇一年、一二二四―一二二六欄)の方はやや複雑であり、そこには、事態の変化のなかでこの概念を巡る手探りの整序努力がなされる様子もうかがうことができる。アーデルンクは、Volk という語に

は、動物について用いられる場合、下僕や兵士を指す場合など広い用法があり、そのほかに、社会の下層民ないし国家の最下層民をしかも軽蔑的に指すこともある、と各種の用法を詳しく考察したのち、最近の文筆家たちは、「ナチオンないし市民社会の最低だが最大の部分という意味でのこの語を価値上げ (adeln) しよう」と試みている」ことを指摘する。そして、「この試みが一般的賛同を得ることが望ましい」として、その理由を「国家の最大の、だが不当に蔑まれて来た部分を、気高く他意無き言葉で表せる語が欠けているからだ」と述べている。つまり、蔑称ではない庶民ないし人民という意味でのフォルク、例えば「フォルクのためのロマン」といった語法の定着が期待されているわけである。

アーデルンクは、さらに、われわれの理解における「民族」に最も近い Volk の語義に進む。すなわち、「共通の先祖 (Stammvater) を認め、また共通の言語によって結ばれる多くの人」という意味での Volk である。しかし、ここでもまた予想に反して、そうした

語をもって呼ばれるのはことごとく古い民族 (古代ユダヤ民族、ランゴバルド人、ローマ人など) なのである。そして、言葉のこの使い方はいまだに行われてはいるが、「普通の言葉使いにおいては稀になって来」、とくに、Nation という外来語が導入されてからは、Volk をその意味で用いることはなくなつたというのである。逆に、アーデルンクによれば、「Volk は政治的結合体を表すことがあつて、それは、ある君主のもとに立つ限りでの多くの人——かりにそれが異なる種族 (Stämme)、言語のものであつても——を指す」とがある」と述べて、Volk という語はほとんど国家臣民に近い意味で使われることもあることを指摘する。

しかし、アーデルンクにとつて、この語法はドイツ語の正しい用い方とはいえない。極めて興味深いことに、アーデルンクは Volk のほかに Völkerschaft という集合名詞をとくに取り上げて説明し、「多くの割合小さい親縁的な Völker を全体としてとらえる」ときの用語、または、「多くの Völker ないし Stämme から成るような Volk を表す」語としては、フォルク

よりもこちらの方を用いるよう推奨する(例えば Französische Völkerschaft, Tatarische Völkerschaft)。かれによれば、この語は恐らく近年になって導入されたもので、フォルクという多義的で、しかも大抵の場合に蔑みのニュアンスを含む言葉を避ける意図がそれを促したのだらうというのである。ただ、同時に、かれが「フランス人」を表すのに das Französische Volk という表現を断固斥け、Französische Völkerschaft に固執するとき、かれの頭には民族・言語混合的であるにもかかわらず単一国民をなすフランスのナシオンというものがあって、そうした実体的確に表現できるドイツ語の探求が試みられていたことだけはまず間違いないだろう。

さて、アーデルンクの辞典第二版に遅れること数年にして、これから最後に考察する J・H・カンペの『ドイツ語辞典』全五巻が刊行される⁽¹⁷⁾。それは、時あたかも大革命・ドイツ帝国の崩壊という政治的激動期にあたり、また、カンペ自身の鋭敏な時代感覚ともあいまって、われわれはそこから、社会・政治的概念に関

するかなり時代同調的な情報を期待することができる。ただ、カンペは、辞典編纂の大方針として、外来語を退け固有のドイツ語に執り立場を貫いているため、例えば、われわれの関心対象である Nation なる語は端的に切り捨てられてしまう。それに反して、Volk 系統の語についてのカンペの考察は極めて興味深い内容を含んでいる。

全体としてアーデルンクを強く意識するカンペは、第五巻(一八一一年、四三三―四頁)に Völkerschaft の項をたて、部分的にはアーデルンクをそのまま使いつながら、しかし、それとは異なってドイツの現実をはじめて引照しながらこの語を扱う。すなわち、「多くの小さい Völker または Stämme からなる Volk」と Völkerschaft の語義を定めた後、カンペはこう述べる。「ドイツ人、すなわち国制の不備のゆえに、確かにある全体にはまとめられているものの、個々のドイツ部分の異なる国制、政府等々により、相互にかなり異なる疎遠な部分をなしているドイツ人が、しばしば Völkerschaft と呼ばれている。この名辞はまた、ド

イツ人を呼ぶのに Volk なる名辞より適切である」と。ただ、ドイツに住むオーストリア人、バイエルン人、ポヘミア人、ザクセン人、プロイセン人などを念頭において Deutsche Völkerschaften と複数形を使う人があるけれど、この語法は、それ自体すでに集合名詞であるこの語の誤用であって、あくまでも Deutsche Völkerschaft でなければならぬ、というのである。つまり、カンペによれば、ドイツ人は「一つのフォルク」と表現することは出来ず、より適切には「諸フォルク体」と言うべきものだ、と診断されているわけである。

そして、こうした現状把握と概念理解は、Volk という語の説明において、この上なく明瞭に定式化される。カンペは、Volk という語の極めて多様な意味を考察した後、最後に、その重要な語義として、フォルクとは「多くの人から成る全体であって、同一の政府のもと、一つの国制の中で生活し、通常は同一の言語を話すもの」を指すという指摘をする。フォルクが、アーデルンクの類似の規定よりいわず非身分制的・国

民的にとらえられているところも目につく点であるが、それはともかく、これがカンペによるフォルクの語義説明の最後であって、「民族」の意味でのそれが終に登場することは無いということだけは、しっかり確認しておかなければならない。カンペによれば、エジプト、インド、ギリシア、ローマのフォルクが云々されて来たのは右の意味においてであって、人々はまた、近くは同様の意味で「しばしば『正当に』イギリス、フランス、スウェーデン、スペイン等々のフォルクを語り、読む」。しかし、残念ながら、ドイツのフォルク (Deutsches Volk) だけは「まだ」欠如している。そして、われわれはそれがいつの日かドイツ帝国 (Deutsches Reich) の廃墟から立ち現れるのを期待しなければならぬのである」と。Deutsches Volk は「まさに将来実現されるべき『予示概念』(コゼレック)」に止まっているのである。

本稿の始めに引用したアールントがそれに呼びかけ、また、フィヒテがナチオンという言葉のもとでそれに語った「民族」としての „deutsches Volk“ は、一八世

紀末の二人のしかも時代状況・言語状況に敏感なドイツ語辞典編纂者の観察において、また、人々が現に用いる語彙として採集され、説明されるところまでリアルな対象には成熟してない、といわねばならぬのではないか。

- (1) Arndt, Ernst Moitz, Katechismus für den teutschen Kriegs- und Wehrmann, worin gelehret wird, wie ein christlicher Wehrmann sein und mit Gott in den Streit gehen soll. (1813). in: Werke. Bd. 10. Berlin(1913), S. 161 f.
- (2) Fichte, Johann Gottlieb, Reden an die deutsche Nation. Berlin, Realschulbuchhandlung(1808). フォヒテの「ナチオン」が国民というより民族の意味におおらう語られている点は改めて断るまでもなく、その Nationalerziehung がどんな場合、それは来るべき国民の形成を目標としたものであることも周知のことであるが。
- (3) この点については、たとえば、Art.; Volk, Nation, Nationalismus, Masse. von R. Koselleck, F. Gschnitzer, K. F. Werner, B. Schönemann. in: Ge-

schichtliche Grundbegriffe. (Hg. v. O. Brunner, W. Conze, R. Koselleck), Bd. 7. Stuttgart (1992), S. 141-431, bes. 141-151, 325-389. を参照。

- (4) Schönemann, Bernd, Volk, Nation. VI-XII. (Frühe Neuzeit und 19. Jahrhundert) op. cit. S. 281-380.

(5) 佐々木博光「出自神話でみるドイツ史」(『人文学報』七一号、一九九二年、九七一—三三三頁)。

- (6) 筆者がこうした検討を試みようと考えたのは、注(3)に挙げた事典の大項目において、コゼレックが行った簡単ではあるが興味深い考察に触発されたためである。Koselleck, Reinhart, Lexikalischer Rückblick. in: op. cit. S. 380-389. なお、本稿に関連して、筆者がもう少し広い枠組みで考えていることについては、山田欣吾「ドイツ史とドイツ民族」(『創文』三四六号、一九九三年、八月)を参照。

- (7) Zedler, Johann Heinrich, Grosses vollständiges Universal-Lexicon aller Wissenschaften und Künste. 68 Bde. Leipzig/Halle (1731-54). (Neudruck, Graz, 1961-64). この事典の発行事情については、大橋 渉「ツェドラー『百科事典』と項目「日本」について」(『和光大学人文学部紀要』二〇、一九八五年、二九九—三一九頁)を参照。なお、本稿の執筆にあたって、大橋

氏には、書誌学的情報その他多くの点で貴重なアドバイスをいただいた。心から感謝を申し上げたい。

- (8) ドイツ民族の由来とその歴史については、実は、こうしたイメージが一九世紀にいたるまで殆ど一般的に支配していた、と言つてよい。例えば、フイヒテが『ドイツ民族に告ぐ』の中でドイツ人とは何かを論じ、ドイツ人と他のゲルマン諸民族を比較した「第四講」から「第七講」の議論にその典型を見ることが出来る。
- (9) この点で鮮やかな対照をなすのは、一八五二年に刊行されたブロックハウスの『百科事典』第一〇版である。その第五巻 Deutschland の項目で、執筆者はドイツ連邦の地理的、統計的記述を行う際、四二〇〇万の人口を国別ではなく何よりもまず民族帰属関係によつて仕分けし、ドイツ系三五〇〇万、スラブ系六〇〇万、ローマン系五〇〇万、ユダヤ人四〇〇万、その他少数のジブシー、アルメニア人などを挙げ、それぞれがどこに多数居住しているかを述べている。

Brockhaus, Allgemeine deutsche Real-Encyclopädie für die gebildeten Stände. 10. Aufl. 4. Bd. Leipzig (1852), S. 730 f.

- (10) Krünitz, Johann Georg, Oeconomisch-technologische Encyclopädie, oder allgemeines System der Land-Haus- und Staats-Wirtschaft. 242

Theil, Berlin (1773-1858)。ここでは、一九八二年に出たマイクロー・フイッシュ版 (Hildesheim, Olms Microform) を利用した。

- (11) Krünitz, op. cit., Theil 227, S. 236-270. Hg. v. C. D. Hoffmann, Berlin (1855).

- (12) ブロックハウスについて筆者が参照しえたのは、第三版、一二巻本(一八一四—二〇年)から第一〇版、一五巻本(一八五一—五五年)まで五つの版であるが、それら諸版の記述の内容的变化を追跡するだけの時間的余裕をもつことができなかった。

- (13) Ersch, Johann Samuel & Gruber, Johann Gottfried, Allgemeine Encyclopädie der Wissenschaften und Künste. Nicht weniger 167 Bde. Leipzig (1818-1889). 「ドルニト・グルーベ」¹⁾と略称されるこのマンモス『百科事典』は、A B 両セクションに分けて A と O から平行的に刊行され始めたが、それでも完成に至らなかつた。筆者にとつて残念なのは、N と V の部分²⁾が未刊のまま終つたことである。

- (14) Adelung, Johann Christoph, Grammatisch-Kritisches Wörterbuch der Hochdeutschen Mundart. 2. Aufl. 4 Bde, Leipzig (1793-1801). Neudruck mit einer Einführung und Bibliographie von Helmut Henne. Hildesheim (1970). ¹⁾ 卷 1, ²⁾ フォーレンツの

